冬の貝加爾湖を壯觀とせば、夏の貝加爾湖に秋の如き靜趣あるは美觀とすべし。湖岸を圍む懸崖絶壁は直に其脚を湖汀に浸し、漣波靜に山色樹影を映す處風物皆秋なり。列車の一小驛に停る時、車窓に迫る巖角の草花兩三種を手折り來りて、靜かに歩を水邊に運び碧瑠璃の湖面に秋の氣に浴するの時、僕既に詩中の人なり。その旅程の上、異境の身たるを忘る、豈亦内地の同人が八月の炎熱九十餘度に苦むあるを想はんや。

この畫趣に對して畫龍點睛を缺くの憾あるは湖上白帆を浮べざるにあり、否白帆といはず、ボートだも獨木船だも隻影だにあらず、この一事以て如何に露國民が天然の平原國民にして水邊の民たらざるを見るべし。彼等は常に魚を賞美す、而も斯る湖水に對して放魚養殖の事すら講ずるなきは怪むべし。只鮮魚を賞美するは露人中の上流者にして百姓と兵士の如き多くは鮮鱗の潑溂たるを窺ひ得ず。

一三 アンガラ河畔の市

貝加爾湖は三百有餘の細流を呑みてアンガラ河の一流を吐く、中部西伯利の古市イルクーツクは水深く流急なる其右岸に立つ。河の左岸に沿ひて廻湖列車の北行する數時、寺院塔尖の十字架朝暉に輝きて先づ目を射、車中の客をして市の對岸に近けるを覺えしむ。イルクーツク驛に着して馬車に移れば馬蹄甚だ輕く、流に沿うて數分時を進み橋梁に出づる時、御者僕を顧みて「橋錢八哥を用意せよ」といふ。橋は船橋なり、橋頭に辻番あり、車上より八哥を與へ了れば御者亦徐に馬車を遣る、橋幅八間許。

イルクーック市は二百五十年の舊市として西伯利露人の他に誇稱するの地、而して對岸大陸との聯絡は二百五十年來一船橋を架して、復一木橋一鐵橋を有せざるは何ぞや、船橋は元軍橋なり、若し一朝有事の日一令下に撤去して市の安固を保たんとするに在りとせばソハ餘りに兒戯に類す。されど僕甚だアンガラ河畔の野趣ある光景を愛す、亦徒に船橋に關して議論を交へざるべし。世界の交通界が古き昔の橋錢制度を忘れたる今日、二百五十年の古市に八哥の銅錢を辻番の手に渡すことの、如何に西伯利趣味に合するかを思ふ。

吾等は今御者に命じてイルクーック二大旅館の一ホテル、メトロポールに馬車を驅れり。河を渡り市場を過ぎ寂しき街上を左折右曲する二十分時、途上の家多くは木造にして所謂西伯利流の構造なり、丸木を重ね合せ其四隅に於て丸木の一端を交叉すること宛然我校倉式なり、專門の學者をして研究せしめば、或は思はざる關係の彼我の間に存するを知り得んか。馬車の止りたる吾等のホテルも、亦校倉式丸木造の三層樓にして一街角を週る、此種の木造家屋にして斯る大建築は稀なるが如し。

イルクーックは其開市以來二百六十九年に亙るの古市なり、黑龍江沿道の露領となりて未だ五十年に過ぎざるに比すれば、正に西伯利の古市と稱し得べし。其舊記を見るに市を廻すに城郭あり、六樓聳え六門通ずと、蓋し支那式城市の風にして其當時支那人若くは蒙古人の露人に比して此邊に威勢を保ちたりしにや如何、只一七一六年の大火は市の全部を焦土に歸し、城郭樓門亦烏有に歸して永に史家の憾を作せり。ヤクーックには三百年前の木造の塔今尚遺存して好古者流の研究を加ふるあり、未開の邊境における二百又三百の星霜は、古史に富む

開明國の千年にも優れり、吾等は斯る好古癖よりして寧ろ今のイルクーツクに丸木家屋の甚だ多きを愛するなり。

市のアムール街一寺院の畔に一基の墓碑あり、高七八尺廻らすに煉化壁を以てす、これ一獨逸人の早き時代における該地方探檢者の墓碑たり、之を土地の有識者に問ふも遂に其年代をすら詳にし得ず、サマルカンド附近に現に一小獨逸村を形造れる獨逸人は、亦早き時代に中央西伯利に遠征したりしならん、一基の碑尚能く獨逸民族の誇とするに足れり。吾等は尚一の墓碑を語らざるべからず、そは『露國のコロムブス』と謳はれたるグリゴーリ、シェレホフの墓なり、彼は露人としての千島の發見者にして、又アラスカ半島の發見者たり、牝獅子の如きエカテリナ女王の代に、かゝる大探檢者を出せるは必ずしも偶然ならざるべし、獨り悲む百數十年後の今日彼が發見したりし兩土、一は之を我と換へ、他は之を米に讓りて亦永く彼が祖國のものたらず、而してイルクーツク市民今彼の墓碑の所在を知るものだに稀なり、豈人生の悲痛事たらずとせずや。

一四 博物館

イルクーツクにて最も吾等に感興を與へたりしは露國地學協會附屬の博物館なり、イルクーツク市大通のアンガラ河に盡くる所、流に臨みて巨人の立像あり、西伯利大鐵道の建設者として亞歷山三世帝を記念する者なり。銅像左背後の街角に石造の二層樓あり、博物館是なり。

五十前後の監視者に導びかれて入る。入口の次室には古物部あり、石器時代に屬する西伯利地方各種族の武器より、前世界の巨獸の頭骨

を羅列す、その石簇石鉈の各種、古銅器土器の種類は皆專門學者の好參考品たるべく、徑二尺大の蛤貝の化石が一百貫もあるべき巨獸の頭蓋骨と相對せるが如き、甚だ吾等の好古心を動かしたり。人種部に歩を移すに、極東におけるあらゆる民族の古器物衣服の標本住屋の模型を集む、ブリヤート族に屬するもの最も多く、トングース族之に亞ぐ。蓋し二族はこれ黑龍江畔古來の種族、愛親覺羅氏がトングース族の南下滿洲に入りたる者より出でて、今日支那四百州を一統せるを想うて、側壁の玻璃箱内に吊れる同民族の服類紋樣の我アイヌ族のそれに酷似せるを見ては、專門學者以外の吾等すら尙且多少の研究を重ぬべきを思ふ。階上に昇るに黑龍江地方における古代各種族の人骨を、同時代の石武器と共に時代別に配列し、特にその人骨の殆ど完全に保存せられあるは、該地方空氣の乾燥せるに因るべし、側面の架上亦無數に各族

の頭蓋骨を羅列す、蓋し人類學部の一室たり。若しそれ錢貨學部に入る、歐露封建時代および西伯利各時代の金銀貨銅錢の數百年に亙るもの二萬五千を算ふべし、吾等はこの館内の小天地に、千年以前の世界の人となりて二時間餘を費したり。

吾等の好古心は博物館裡東方各種族の古器石簇に痛く動きて、吾等は市内の一骨董店に彼等を漁るべく至り、二百年前の古錢と十字架と彼得大帝時代の『法令集』一卷とを獲て、イルクーツク來遊の好記念となせり。

一五　地名上の疑義

吾等今回の行イルクーツクを限とす、乃ち同市を辭し再び廻湖鐵道

に由りて後貝加爾州に入り、新にシルカ河に沿へる同支線に移りて黑龍江上の游航に此行の終を壯にせんと欲す。多くの地圖多くの紀行を見るに、後貝加爾線中ストレチェンスク支線の分岐點を以てクルキムスカヤ驛なりとなすも、實際は同驛の東約十哩の地點キタイスキー！ラヅエヅドの稱ある一小驛より分岐北行するなり。尙これと共に地理學上の一疑問あり、卽ちシルカ河畔の市ストレチェンスクの名稱なり、露國の出版物及一部の露人はスレチェンスクと稱してストレチェンスクと云はず、露國の官文書すらT字を加ふるものあり脫するものありて一樣ならず、之を其地の二三露人に質せるも辯ずるものなし、此の如きは僅にT字の有無に過ぎざるも、地理學上の疑義として專門家の研究を要す。

一六　黑龍江の河船

シルカの河水を橫斷したる吾等はストレチェンスク市に着してホテル・ブチーに投じたり。館は河流に臨みて汽船發着所を距る數十間の下流に在り、窓下二汽船の埠頭に碇泊せるは、共に相前後して黑龍江を下らんとするものなり。樓上より望むに此邊の河幅僅に十町許、對岸には後貝加爾鐵道支線の此處に盡きて、背後の小丘には新古の陋屋彼處此處に數團をなすあり、舊來の哥薩克屯田村と新來の移住民なりといふ。蓋しシルカ及び黑龍江沿岸の殖民は、五十餘年前愛琿條約訂結の前後、早くも奇傑ムラキヨフの先見によりて其の基礎を開き得たりし所にして、黑龍江航行汽船が亦同時の創設に屬し、政府の保護下に此の長江沿道の唯一交通機關たるに至りたるは露人の遠謀といふべ

し。

黑龍江が露清兩國の國境を作して、而して露國の獨り陸に民を殖るも水に船を浮ぶる爰に五十餘年、支那の國權論者が此頃俄に騷ぎ立てゝ邊境の防備、黑龍江省の拓殖を叫ぶは正に半世紀を後れたり。五十四年の歷史ある黑龍江の河船は、現時黑龍江汽船會社なる一株式會社が三十二萬圓の保護下に定期郵便船として營業し、本流支流に亙りて百四五十隻の汽船を浮ぶ、此外尙社外船ありて同じく黑龍江の本流ゼヤ、シルカ兩河および松花江の間を上下し、定期郵便船の只左岸露領のみに寄港するに反して、左右兩岸露清の各村落に寄港す、黑龍江上の汽船は意外に發達したるものなり。

一七　江上の火輪船

二十世紀の今日外輪附の汽船は墨田川の一錢蒸氣のみなりと想ふ人あらば誤なり、大國露西亞の一大長江を上下するの汽船は、皆外輪又は後輪の蒸氣船にして燃料も亦薪なり。會社の事務所に到り出帆の日を問ひて切符を求むるに、ブラゴウェシチェンスクまで一等一人二十九留九十六哥なり、兩地間の航行浬數は七百十浬にして其間十六個村に寄港し、航行日數の如きは六日乃至八日の豫定なり、只一等賃金の約三十留なるに比して三等船客の運賃が僅に三留なるは、此航行が主として沿岸村民の便益を目的とするを知るべし。

翌日正午の出帆なりといふ汽船「アドミラル、チハーチェフ」は、既に埠頭に在りて乘客の希望次第前夕より乘込み得べしといふに、航江の汽

船は皆炊事自辨の定なれば、吾等は市に出でてあらゆる食料品を準備し、八月廿一日の夕數個の手廻と共に汽船に移れり。

一八　植民の苦心

吾等今黒龍江航行の汽船に客となりて、シルカ河兩岸の風光を甲板上に賞しつゝ下るに、其左岸なる愛親覺羅氏の領土が殆ど天然の儘に遺棄せられあるに反し、右岸の露領が或は直に水に臨み、或は岸を距る千數百米突の地に大小幾多の村落を成し、木造の寺院その中央に聳ゆるあるを見て、露國當年の植民の苦心を想はずんばあらず。

露國革命家としてクロポートキン公の名を知らざるものは稀なり、彼は露人中の有名なる大旅行家にして、又世界における知名の經濟學

者たり。彼は一八六三年を以て此の露國の新領土に遊び、親しくシルカ、アムール兩江の流域を視察して、其新領土の統治者總督ムラキョフの治績を見たり。有名なる彼の著書『革命者の手記』中當時の實狀を記して曰く

西伯利流刑囚中一千人の女囚はアムール下流方面植民のために放免せられ、而して苦役より脱するの日直に哥薩克壯丁中に婿選びを強ひられぬ。將軍ムラキョフは自からシルカ河の邊に臨み、シルカの水にて千人の新婦に洗禮して言ふ「新婦等よ永く此地に新郎と樂めよ」と。予の此地に再遊するや、當時の喜劇より既に六年を過ぐ、村は貧にして田畑は虎の荒すに任すも、而も一般の狀態に於てムラキョフが河畔の訣別辭は活きて事實となれり。而して當年の新郎新婦相愛の印として、露國子女の此新領土に呱々の聲を擧げ、僧

官インノケンチーをして彼等の名をアムール河畔寺院の戸籍簿に登録せしめ得たりと。

是れ豈黒龍江畔無人の境に於るスラヴ健兒の植民苦心史に非ずや。

一九　江上の曳船

アムール航行汽船の特色は平底の大曳船に貨物を滿載して千里の江上を上下するにあり、親船の汽船は上層を客室に充て、下層を亦下等客室と燃料薪材との置場に充て、主たる貨物のために少くも一二隻多きは五六隻の平底船を曳くを常とす。吾等の「アドミラルチハーチエフ」號も亦鋼條によりて一隻の平底船を曳く、その積む所生牛一百頭、一千百餘里のブラゴウェシチェンスクまで一頭の運賃五留なりと聞く、三等客一人の運賃に比して高率なること二留。

八月念二ストレチェンスク埠頭拔錨の朝、船室内の氣溫七十四度にして午下既に八十八度に昇る、朝夕と晝間と氣溫の激變概ね此類なり。

二〇　兩岸の紅白燈

シルカ河流が黒龍江への合流點に近きあたり、兩岸の相開く處河幅一哩に及び、忽ちにして南岸の懸崖が北岸岸上の落葉松林に相對して迫るや、河幅僅に四五百米突を超えず、流甚だ急にして水愈々深し。吾等の「アドミラルチハーチエフ」號は、一時間八九哩より十二三哩の速力を以て江上の航路を進む。その夜に入るや紅色の燈火は清傾の岸頭より輝き、白色の燈明は露領の岩角より到る。而して吾等の汽船

が高く紅綠の舷燈を揭げて右岸の紅燈より左岸の白燈へ、白燈より更に紅燈へ針路を取り、水上斜線を劃しつゝ水を蹴つて進む時、江上の夜色は淡霧に包まれ、岸上の樹梢より吹到るの夜風は水に落ちて靜なり。

黑龍江鐵道工事は兎も角も既に着手せらる、而かも江流に沿へる各市村落には左程の影響なきが如し、これ新鐵道が江を距る北方一百哩の地を通過すべくして、僅にチャソワヤ、ジャリンダ及ブラゴウェシチエンスクへの三支線敷設により沿岸地方との關係甚だ淺きに過ぐるがためなり。されどジャリンダ村の如き、汽船の碇泊中を利して埠頭に上り見るに、既に支線の一端敷設しありて貨車すら二三輛埠頭に在り、只軌條の僅に五十ポンドものなるより察するに、支線は極めて惡鐵路に過ぎざるが如し。

二一　漠河附近の景

八月廿四日拂曉、夜來の冷氣は終に江上一面の濃霧となりて復咫尺を辨ずべからず、汽船投錨の音に夢破る。時冷氣恰も我冬に似、船室內に在て六十度を下る。午前九時を過ぐる頃霧漸く晴れて拔錨進航を續くるに、此邊既に淸領漠河附近なり、正午の頃日漸く昇り甲板上七十五六度、船客皆室を出でて甲板の椅子に倚るに、柳絮風に從つて頻に飛び、溫暖膚に好く春日內海を航するの想あり。夕刻ジャリンダに寄港す、此地對岸漠河を去る遠からず、背後に亦大金坑を有す、黑龍江鐵道支線の此地點に敷延せらるゝよりするも將來幾分の發達を見るべし。

吾等の汽船の寄港するや邦人六七名、韓人十數名、露人と共に先づ埠頭に在り、僕上陸して彼等に近づき、其語るを聞く、曰く露領の諸金坑近

來一齊に韓人坑夫を逐ひ、日人の居住者を迫害すと、傍に四五の露人あり一揖して至り、露國當局が最近金坑に韓人の使用を嚴禁せるは、坑業主たる吾等のために容易ならぬ打擊なり、此際日本官憲の一盡力を願ふといふ、蓋し吾等の一行を領事の巡廻と誤認したるなり。外交權を我に委任したる以來の韓國人は、此方面において著しく露國官憲のために排斥せられつゝあるなり、我國當局者は在外韓人の保護につきて、一定の方針を確立するの要あり。

二二　大黑河村

團匪事件に當りて支那土民の血と肉とに大江を埋めたりしブラゴウェシチェンスクの對岸清領には、最近一新村の開かれて大黑河の名さへ冠せらる。新村に相對せる武府は、四十年來黑龍江中流の大市として十數萬の人口あり、高樓大厦少からざるも自由港制廢止の結果、市況は漸く沈衰し市民亦生色なし、而して市民の窮狀は終に其對岸清領に大黑河の一村を現出し、清人清商の利に敏き、今や此新開村をして該方面に於る密輸出の策源地たらしむ。武府の下層露民等は或は一杯の醉を買ふべく、江に棹して清領に到り、或は稅關又監視所を避けて戎克船に雜貨の密輸入を行ひ、稅關吏員亦その已むなきに同情して看過するの風あり、露領自由港閉鎖の露民を苦むるの實狀此の如きものあり。大黑河村には既に邦人十數名あり、武府現住邦人の少しく露官憲の壓迫に憤るもの、漸く對岸に移り行かんとす。大黑河村は所謂愛琿街道の極北端なり。

二三　船中の灸點

アムールの長江は航行上これを三大別し、ストレチエンスクより武府までを上流とし、武府ハバロフスク間を中流とし、それより江口までを下流となし、上中下流各々船を代ふ、水深と吃水上の關係なり。吾等は乘船以來六日にして武府に着し、再びハバロフスク行の切符を買ひて八九百噸、吃水八九呎の汽船「バロン、コルフ」號に乘移れり。

武府の埠頭を辭するの時、江上豪雨到りて亦對岸の風物を認め得ず、船客皆室に入りて風雨愈加はり、船脚獨り水流と共に急なり。欝翁に和癖あり、黑龍江航行に先ち船中和食を取るべく、一邦人の庖丁を途に傭ひ、行に加へて共に船に乘らしむ、醬油をチタ市に得、味噌をストレチエンスクに尋ね出し、鰹節をブラゴウェシチエンスクに獲たり、而して

鞄底亦久しく艾と線香を收む。欝翁僕を見て曰く、六日間の江上生活倦怠を覺えざるに非ず、而も中流の航行尚三四日を要す、今日快雨到りて江上雨中の景甚だ賞するに足る、灸點を脚部に施して心氣を爽にする亦可なりと。乃ち兩脚を延べて下火數十點す、船室內香烟濛々たり。

夕刻の頃雨全く霽れて蒼空を見る、甲板に出づるに大虹江上に横はつて船頭に在り、空蒼くして水亦碧く、兩岸遠く開くの處架するに五彩の天橋あり、此畫趣數日の倦怠を償うて餘あり。

二四　浦港の誇

浦港にて驚くべきは獨商アリベルスの大雜貨店にもあらず、砲臺附近警戒の嚴なる一事にもあらずして、東洋學院圖書館裡の滿蒙の古書

と、浦港博物館内珍藏の永寧寺の古碑是なり。自由港制廢止後の浦港は貿易關係において殆ど日本と沒交渉なり、隨つて通商上の浦港は暫く之を說くの要なし、獨り沒趣味なる露人が、其植民的領土に斯の古碑と斯の古書とを藏するに至りては珍とすべし。

永寧寺記及び重建永寧寺記の二古碑は露人によりてニコラエフスク附近の地に發見せられ、今は移して浦港博物館裡に珍藏せらる、卽ち明の一統時代に在て、其文化の遠く黑龍江口にまで及びたるの事實を窺ふに足り、且其碑面に支那、蒙古、西藏、女眞の同一記事あるは專門學者の研究に資する大なるべし、滿蒙の古書に至りては團匪事變に際し、露軍の奉天の書庫に入りて掠奪したりし所にして、東洋學院圖書室滿蒙部の書架二百餘段に亙りて充載せらる。此の兩者は啻に日本人たる吾等を驚かしめたるのみならず、支那人をして若し之を目擊せしむる

亦必ず一大喫驚を買はん、索莫たる浦港のために珍寶とすべし。

（明治四十二年夏稿）

所謂鄰境の狀勢は、此の巡遊以後の七年に於て、果して如何の變化を見たる。朝鮮の事は併合の大史實として國際的に變化を見たるも、而も山河世態の面目亦多く相違を見ず。若し夫れ松花江畔の風物、貝加爾湖邊の事態、黑龍江畔の矚目に至りては、今猶ほ昨の如きものあり。今舊稿を新裝するもの亦溫古知新の一方途のみ。（大正五年冬識）

旅裝遊具

一　古人の旅行用意

古人は今人に比すれば何事につけても細心にして懇切である。旅行上の用意の如きも可なりに綿密な點が窺はれる。私は今其の實例として澤元愷の『漫遊文草』中の「遊具略」の一章を爰に採錄しようと思ふ。

遊具略

余好游而乏給、唯有濟具僅無恙爾、是以孤劒千里、不願與人偕、偕則取舍或不同、得意之勝、討尋難究、但雨衣之疣我肩、游囊亦不可放下、若擇隨跟、

宜取愼默質朴者、唯奴僕不伶爲伶爾、已有所齎、亦有便宜、今錄可佩可齎之物、以待山水之緣爾、

服佩之物、貴簡略、多一物增一累、春秋絮衣若袷、繭紬結城紬爲佳品、不宜京縑綢紗、新者已侈、故則易弊、且惡雨露故、

袒服二、用布若紬、不宜袷、有汗濕、不易暵乾、

外被用袗綢、春秋皆宜、夏日不必著、外被俗所謂羽折也、

夏衣不用晒布、宜用吉貝若紬、余每用琉球布、亦佳、但晒布越布、逗影而不堪、吉貝卽木綿縮、琉球布、謂之阿伊左備、

所謂股引脚半連縫者不便涉水、亦不兼冬夏、夏日唯著脚半耳、覆膊用染布製、所謂蔑里耶須、亦不妨、

帶莫所擇、褌亦不拘、若用木綿者、全幅七尺、斜裂爲二、余常好用、但三尺帶、以木綿製、長六尺、

韈必用無底有底者病足草鞋不厭搗不則嚙足一日有嚙爲數日之累斯二物游人所宜戒飭也

佩刀欲短若不短遭嶮而困必施外鞘所謂引肌也方攀根踞巖恐戛刺也其柄革條卷緊不用尋常柄袋本又不利急遽也佩牛佩犢殆類青松喝道然非常在山間亦復行驛路不易省已是故欲短

夾囊如僧家衣囊之制衣裡掛頸囊中收匕箸藥物羅針卷尺韻箋略曆等余每紀行於手摺亦收但要躔金多則自疑使人疑我宜計日計程有小餘況貧如余者

雖有從者錢囊必佩右著錢囊與左刀爲衡利于步行用鄙俗呼做發耶密致者

烟具用有別子此物及摺扇布悅火連子皆宜有副夏日扇宜輕輕則易失墜亦置副春秋余用鐵骨扇亦供護身之警

墨斗之制多品余試用極多今所用如印籠制挿其柄而垂

菅笠深者爲善淺則不掩斜陽亦不耐烈風

竹杖携捨而不愛者已捨復思乃求路旁而造

使奴負擔者宜輕便重則多累衣箱二用商旅所携呼做柳古里者長尺八廣尺許高七八寸裹以油紙以麻絲網緊結若買馬用作假鞍扳阪時栓束以負其一實絮衣一袷衣二夏日不必省袗衣一越布衣一外被絮者一袷者一袗者一夏則加羅者一袴二其一有緣者所謂野袴也袒衣褌韈裹以布袱袱亦是備用其一則實雨衣浴衣沐具紅氈小被蒲團有木枕枕中實嗽具及蠟條即都下所粥懷中蠟是也箱外置油衣二其一從者之用又置無底韈二副備雨也

必有小廚以貯摶飯余用有馬所造竹箱夏日不饐極佳點心盒二其一實蔓魚提燭蠟筒等亦皆用麻絲小網掛而贅提燭呼做小田原者爲便

贅之又贅者、別備一革囊、卽呼做革胴蘭是也、收詩文小冊、游記、行程記、鳥欄紙、小菊紙、侏儒紙、小研、小刀、筆囊、印篋、遠眼鏡、打碑具、藥物、藥則備急丸、五令散、熟艾、附子、紫藤、藿根、熊膽、半夏抹、皆不可闕也、若不用隨跟、則負擔已下皆省、藥物亦僅存、若有同行、各自具備、不必相待爲用也、若夫所謂馱貨帳、往來切手等物、須備可備、有關津之地、需路引、以往、固不待言已、

更に旅行上の用意を書いた古書としては文化七年の開彫にて『旅行用心集』なる一卷がある、著者は不明なれど書中往々參考に資すべき項目が尠くない。就中寒國の旅行に關するの條は特に一讀の値あると同時に、亦古人の用意の周到なるを窺ひ知るに足ると思ふ。今左にそれを抄錄する。

『雪中の旅は假令上戸なりとも大酒決してすべからず、大酒すれば身熱して吹雪を事ともせぬ心地になれども、山野の滿雪、道路は勿論田も畑もなく一面の平地となる故醉體の元氣にて方角を失ひ、深き溝洫に落入りて遂に凍え死ぬ人多し。』

此外に寒國で用ひらるゝ冬季の旅具の種々なる圖解があるが、爰には省略する。

二　準備と覺悟

準備は整到ならざるべからず、覺悟は放膽ならざるべからず。是れ恐らくは其の探檢たると尋常旅行たるとを問はず、旅行第一の要諦である。良き航海者は有ゆる航海記の精讀者であるやうに、理想の旅行家は紀行又は報告書等の精讀者であらねばならぬ。現代の探檢若くは大旅行に關する準備の大體を左に述べる。

一、携帶行李は能ふ丈少數にして少量なるを旅行者の誇とする。尙ほ行李中の品物は何時にても放棄して遺憾なき物を理想とする。

一、携帶品は旅行の種類によつて異なるが、望遠鏡、懷中電燈、魔法罎、小刀、細引、油紙、藥品、磁石、地圖及時計(可成二個並に近眼者なれば近眼鏡二

三。

一、天幕の携帶を必要とする場合は、蚊帳、防蟲劑の用意も亦必要である。天幕を張るは能ふ限り砂利多き場所を好しとす、害敵卽ち人獸の跫音を聽き易き利がある。

一、日本內地の普通の旅行には齒のある下駄最も可、未開地に於ける大旅行には膝の上まである長靴に慣るゝ必要がある。ヘディン氏の中亞探檢記中には、林地より水を獲て之を天幕まで運ぶに、露西亞式の深い長靴に水を汲んで擔いで行く畫がある。長は短に優り、大は小を

兼ねると知れ。

一、寒地寒氣の旅行には眞綿を用意せよ、歐洲人も此頃漸く我が眞綿の眞功用を知り初めたやうである。今度の歐洲戰爭に露西亞で眞綿のチョッキを着用した人さへある。懷爐も亦或場合必要である。

一、若し覺悟と云ふ點になれば疊の上で死ぬるも、旅で死ぬるも同樣であるとの覺悟を第一とする。古い諺に「川好きは川で果てる」といふことがあるが、旅行好きが旅で死ぬのに不思議はあるまい。蠻人の槍の錆になれば、キャピテン・クックと運命を同じうした譯だ。或は猛獸の牙に斃るゝも亦辭する所ではない。只地理學地理書に關する知識に依てのみ之を免かるゝ場合があらう。

昨大正五年には登山旅行で、三組の記念すべき慘事が起つた。前途

多望なる四人の學生、登山の經驗に富む一人の壯者、及び植物病理學に於て我農科大學唯一の青年學士が、相前後して山の犧牲となつた。返す返すも吾々旅行黨に取つて痛恨事であるが、年々增長する登山熱は、此の不祥事の爲めに衰微することはなからう。それにしても私は、旅行や登山の研究指導を任とする、中央旅行協會なるものゝ創立せられんことを希望するものである。

世界を家として 終

大正六年一月十八日印刷
大正六年一月二十日發行

不許複製

世界を家として

定價金壹圓參拾錢

大正名著文庫第廿九篇

著者 大庭景秋

發行者 東京市日本橋區本石町三丁目十四番地 加島虎吉

印刷者 東京市本所區番場町四番地 守岡功

印刷所 凸版印刷株式會社分工場

製本 高崎製本所

發兌 東京市日本橋區本石町三丁目 電話本局長三六六番二一六七番 振替口座東京一七四四番
東京市日本橋區人形町通佳吉町 電話浜花一九四九番 振替口座東京一九八四二番
至誠堂書店
至誠堂小賣部

大正名著文庫

第壹編

法學博士 和田垣謙三先生著

兎糞錄

挿畫 川村畫伯三色版二葉 一齋藤畫伯木版三葉

第貳編

大町桂月先生著

人の運

裝幀 川村清雄畫伯

四六判特製美裝 定價各册金壹圓參拾錢 郵稅各金八錢

大正出版界を震動せる
破天荒の一大快著

好評湧出天下無比

◉東京朝日新聞曰く、折に觸れ時に應じ興來り情湧く毎にポツリポツリポロリポロリ飛び出したるもの卽ち是れとこれ兎糞錄の名ある所以なり所謂和田垣一流の洒落狂歌を續發し得意の英語を應用し詩歌俳諧を自由に雜へて意表外の落を取る等人をして覺えず哄笑を禁ずる能はざらしむ◉實業之世界曰く、收むる所百卌篇悉く金玉の響あらざるはなし博士例の輕妙洒脫飄逸奇警奇想落天外の俳想により噴出したるもの一讀再讀三讀尚且つ飽くを知らざらしむ兎に角如何のものにやと一度手にして先づ電車裡に之を讀む然るに我知らずフフンと噴き出して向側の乘客に怪まること屢也宅に持ち歸りて讀む又しても家人の怪む所となり遂に書中の説明を爲せば一時に笑聲起りてフフン所に非ずキャッキャと叫ぶ評者は頤を解き腹を抱へ又泣かされたり實に滑稽の奥に涙を藏し諧謔の底に人生の眞理を寓す世を啓發し人を誘導し無限の活敎訓を含む今古獨歩なり

內容一斑

◉運は運也運轉する也◉獨斷の人を去つて果斷の人に來る◉頑固の人を去つて自信ある人に來る◉酒に溺るゝ人を去つて酒に狂はぬ人に來る◉女に迷ふ人を去つて女に優しき人に來る◉屁理窟云ふ人を去つて道理を解する人に來る◉躁急の人を去つて勇往の人に來る◉心の動く人を去つて才智の動く人に來る◉己に寛大なる人を去つて人に寛大なる人に來る◉自暴を起す人を去つて憤を發する人に來る◉人を怨む人を去つて人を愛する人に來る◉肩先の勇氣の人を去つて腹底の勇氣の人に來る◉自ら侮る人を去つて分を守る人に來る◉慾の多き人を去つて慾の大なる人に來る◉傍觀する人を去つて奮闘する人に來る◉顧慮する人を去つて熱慮する人に來る◉厭き易き人を去つて見切の善き人に來る等警拔人の意表に出づ

◉大日本茗溪會に於て普通敎育振興の爲め大正三年二月全國青年の讀物として近來の傑作として審査選定せらる

◉發兌 東京市本石町 至誠堂 電話本局長三六六六番 振替東京一七四四番

大正名著文庫

第參編

杉村楚人冠先生著

へちまのかは

口繪 六大畫伯六葉

第四編

浪六先生著

罵倒錄

口繪及裝幀 著者自畫自書

四六判特製美裝 定價各册金壹圓參拾錢 郵稅各金八錢

大日本茗溪會より本書を普通敎育振興の爲め大正三年五月全國各學生及び青年の讀物として審査選定せらる

世評一斑

◉時事新報曰く著者二十年間の波瀾ある生活を敍述せしも氏の筆やゝ斷じて他の模倣追隨を許さゞるものあり獨得の調子と奇想天外の落想とは必ず讀者を魅し去つて已まざるべし。……

◉萬朝報曰くリアンの學生、講師、官吏、新聞記者、渡歐等約二十年間に亘る著者の實生活を描出したるもの著想奇警加ふるに新らしき圓熟せる筆致を以てす洵に趣味廣き楚人冠獨得の好著といふべく以て妙筆として「みいすのたはこと」「兎糞錄」等に對せしむべし。

◉日本曰く著者生來の機智と英文脈より來るユーモアとは遺憾なく窺ふを得べく何れも棄て難き小品ばかりなり

◉浪六先生曰く、あまり大膽に露骨なる無遠慮に過ぎたれど、實際是れが我輩近來に於ける快文字なりと！

◉實業之世界曰く、本書は大正名著文庫の第四編であつて其雄健にして圓轉滑脫せる工合なんどは凡筆とは決して云へないのである▲本書は氏一流の筆鋒を鋭くして、片端から小氣味よく罵倒した社會觀人生觀浮世觀で其の世道人心を縦論横議せる所、キビ〳〵として痛快を極めて居る▲精勵刻苦の蟻が午睡を貪つて居る人間を罵倒する、春麗かなる日、蹴として戲るゝ雄蝶雌蝶が人間の戀は偽りであると罵倒する、上野の森に憩ふ鷄共が樹の下を通る氣障なハイカラに糞をひり掛けようと相談する、其他色男の解說婦天下の解說、江戸ッ子と上方贅六等何れも輕妙奇警な文字四十八項の多きに達す▲讀み去り讀み來り無量の興味が滴然として湧出する……

◉發兌 東京市本石町 至誠堂 電話本局長三六六六番 振替東京一七四四番

大正名著文庫

法學博士 和田垣謙三先生著
第五編 **吐雲錄**
口繪及挿畫（齋藤畫伯 川村畫伯）

第六・七編 浪六先生著 元祿 **四十七士** 上下全弐册

四六判特製美裝 定價各册金壹圓參拾錢 郵税各金八錢

世評一班

◎大日本茗溪會に於て普通教育振興の爲め大正三年十一月本書を全國中學上級生相當の讀物として審査撰定せらる

◎東京朝日曰く、著者前に兎糞錄を出して其滑稽突梯にも見飽すべきが本書は之が姉妹篇とも云ふべしと雖も人の嗜好に就きまこと熱狂せしめたる中英語の新聞に著者の例の獨得の中央新聞曰く、麗に兎糞錄を出して江の湖讀書子和田垣博士が例の本書のノートを片ツ端から摘出し得るも如何なる一篇と雖も悉く是博士が博學なる短篇なりつて輯めしめたる小篇と至る大なる教訓を含む或は警句或は奇なる諷諫なり共此の書を揮毫せんと欲する者は是非一讀すべしと曰く、本書の如き明治大正の頃溜池の邊に遊ひて訓戒を下げらるべかりす◎日本の隨筆も

そも〳〵勅使下向より筆を起して殿中の又傷内匠頭の最期一黨の苦心赤穂の開城に至るまで吉良家討入に至るまで惨憺たる其間に最も顚末を盡して其外傳を精なる四十七士の加へる四十七士の忠義膽結晶せるこれ史實と趣味と確なる全編せるもの他に類を許さるる筆法は千古の痛快なる浪六先生一流の痛快なる筆法は千古の痛快なる浪六先生一流の痛快を描き出して餘蘊なし正に是れ義士傳中の白眉なり。

大日本茗溪會に於て普通教育振興の爲め大正三年十一月本書を全國青年讀物の上乘として審査撰定せらる

發兌 東京市本石町 至誠堂 電話本局長三一 振替東京六七一 六六四四 六六四四番

大正名著文庫

文學博士 幸田露伴先生著
第八編 **洗心錄**
裝幀 川村清雄畫伯

竹越三叉先生著
第九編 **三叉文存**
裝幀 川村清雄畫伯

四六判特製美裝 定價各册金壹圓參拾錢 郵税各金八錢

世評一班

◎萬朝報曰く、深支幽妙なる人格の響を有するその想、字句無縫の天衣を忍はしむるその文、隨筆家として眞に出でんか……

◎東京朝日曰く、露伴趣味に關する者修辭風物に輯む短篇凡そ六十種を評する者畫を語る者文を談ずる者にあらざるはなし人間の俗塵を洗ふ清涼劑「洗心錄」の名得りと謂ふべし……

◎國民新聞曰く、幽遠なる哲理に入るあれば又日常茶飯事に亘りて說ける……

◎時事新報曰く、評論あり史傳あり典雅清楚の文章誦すべし……

◎所想兩々相喚發して讀過蕭風自ら生ずるは露伴氏の風懷幽遠なる月浮生の外乾坤の間に悠々自適して白雲の如き……

◎に時事新報曰く、評論なきも感想あり小品あり適く佳なるも才識也短勁の文支離なるも養の悉く別天地消息を傳ふる者にあらざるはなし人間の……

◎時事新報曰く、深支幽妙なる人格の響を有するその想、字句無縫の天衣を忍はしむるその文、隨筆家として眞に出でんか……

◎東京朝日曰く、露伴趣味に關する者修辭風物に輯む短篇凡そ六十種を評する者畫を語る者文を談ずる者にあらざるはなし人間の……

◎國民新聞曰く、幽遠なる哲理に入るあれば又日常茶飯事に亘りて說ける……

◎時事新報曰く、評論なきも感想あり小品あり適く佳なるも才識也短勁の文支離なるも養の悉く別天地消息を傳ふる者にあらざるはなし人間の……

◎東京朝日曰く、露伴趣味に關する者修辭風物に輯む短篇凡そ六十種を評する者畫を語る者文を談ずる者にあらざるはなし人間の……

◎國民新聞曰く、幽遠なる哲理に入るあれば又日常茶飯事に亘りて說ける……

◎時事新報曰く、評論なきも感想あり小品あり適く佳なるも才識也短勁の文支離なるも養の悉く別天地消息を傳ふる者にあらざるはなし人間の……

◎東京朝日曰く、露伴趣味に關する者修辭風物に輯む短篇凡そ六十種を評する者畫を語る者文を談ずる者にあらざるはなし人間の……

◎國民新聞曰く、幽遠なる哲理に入るあれば又日常茶飯事に亘りて說ける……

◎時事新報曰く、評論なきも感想あり小品あり適く佳なるも才識也短勁の文支離なるも養の悉く別天地消息を傳ふる者にあらざるはなし人間の……

◎東京朝日曰く、露伴趣味に關する者修辭風物に輯む短篇凡そ六十種を評する者畫を語る者文を談ずる者にあらざるはなし人間の……

◎國民新聞曰く、幽遠なる哲理に入るあれば又日常茶飯事に亘りて說ける……

◎時事新報曰く、評論なきも感想あり小品あり適く佳なるも才識也短勁の文支離なるも養の悉く別天地消息を傳ふる者にあらざるはなし人間の……

◎東京朝日曰く、露伴趣味に關する者修辭風物に輯む短篇凡そ六十種を評する者畫を語る者文を談ずる者にあらざるはなし人間の……

◎國民新聞曰く、幽遠なる哲理に入るあれば又日常茶飯事に亘りて說ける……

◎時事新報曰く、評論なきも感想あり小品あり適く佳なるも才識也短勁の文支離なるも養の悉く別天地消息を傳ふる者にあらざるはなし人間の……

◎東京朝日曰く、露伴趣味に關する者修辭風物に輯む短篇凡そ六十種を評する者畫を語る者文を談ずる者にあらざるはなし人間の……

◎國民新聞曰く、幽遠なる哲理に入るあれば又日常茶飯事に亘りて說ける……

◎時事新報曰く、評論なきも感想あり小品あり適く佳なるも才識也短勁の文支離なるも養の悉く別天地消息を傳ふる者にあらざるはなし人間の……

發兌 東京市本石町 至誠堂 電話本局長三一 振替東京六七一 六六四四 六六四四番

大正名著文庫

第十編　文學博士　前田慧雲先生著
活修養
裝幀　川村清雄畫伯

第十一編　加藤咄堂先生著
人の心
裝幀　川村清雄畫伯

四六判特製美裝　定價各册金壹圓參拾錢　郵税各金八錢

世評一斑

大日本茗溪會に於て普通の教育振興を爲め大正四年一月本年を全國中學書子弟上級青年の修養を審査撰定せらるる

◎諺に曰く、思ふに是れ最近の出版物中萬人の虚石缺くべからざる現代の新論語ならんか◎萬朝報曰く、深奥なる佛教の知識と該博なる先賢の事蹟とを引きて吾人の日常生活に必要なる通俗道德を説けり◎國民新聞曰く宗教界の書宿たる著者の學德一代に高きとは言ふ必要がない本書に載する五十五篇皆時代の國民が修養工夫の途を講説したるもの而して古來佛教が我國民性に浸潤すること深く廣きものなるとを思ふ時著者の如き人を得て初めて完全なる教化指導の人を見出したと言つて好いのである後進子弟は之に依りて赴くべき方向に迷ふことなきを得る

◎太陽曰く、著者一流の見識を以て縱横に人心の機微に觸れ落せんと用ひ正に懷疑し盲動し墮せざる人心を維繫せんとの人心に對する一警策である吾人は危道心を出現せしめざるべからず今日に於て特に此書の默會せらるる者は人心の迎合を歡迎する者なり

◎萬朝報曰く、讀過人心の機微を穿つ此書の讀了せんとする者は人心の中に潜入して人心の奥底に隱れ明せんとしたるものの即ち本書の傳説の影響を受くること深く廣く古今の人心を動かす力あり

◎國民新聞曰く、著者は一流の見識を以て正に懷疑の人心に對する一警策である吾人は危道心を出現せしめざるべからず今日に於て特に此書の默會せらるる者は人心の迎合を歡迎する者なり

◎報知新聞曰く、著者は一流の見識を以て正に懷疑の人心に對する一警策である吾人は危道心を出現せしめざるべからず今日に於て特に此書の默會せらるる者は人心の迎合を歡迎する者なり

◎發兌　東京市本石町　至誠堂　電話振替東京一六六四　局番　長三六六七

大正名著文庫

第十二編　大内青巒先生著
破木杓
裝幀　大内齊畫伯

第十三編　長谷川如是閑先生著
搦手から
裝幀　大野靜方畫伯

四六判特製美裝　定價各册金壹圓參拾錢　郵税各金八錢

世評一斑

◎時事新報曰く、敢むる所は皆古人及び今人の總行にして著者之を觀察するに三信三綱領を以てせり、而もこの濁より清を酌み舊より新を掬ひし破木杓の尊さよ、世の修養書といふもの概れ乾燥無味ならざれば取材偏狹、固持頑迷ならざれば浮薄片々、少しく理智性の人間には殆ど持續迷ならざれば浮薄片々、少しく理智性の人間には殆ど高遠なる眞理を盛り寸言分句なほ讀者平易なる言辭の裏に比し本書のみは能く首肯せしむる所以のものは何の爲ぞ、破木杓も著者の手掛りてしたらすんばあらず……

◎中央新聞曰く、十數方衆生を開悟すること高僧傑士の尊き拂子たらすんばあらず……

◎報知新聞曰く、琴線に觸れて多大の感動を與ふ……

◎時事新報曰く、著者の小説は今日文壇の評價に上の平淡なる創作類とは全く其の趣を異にしマアクトウエンの一端なる文字の親ふべし、著者の眞に修養錬磨せる人格と高遠なる思想の上乘なるもの……

◎日本總及び日本人曰く、解實に如文字釋にし是閑氏至つて世に知らるる人の書に求むべしとなす大正名著文庫中慥に

◎發兌　東京市本石町　至誠堂　電話振替東京一六六四　局番　長三六六七

大正名著文庫

第十四編　醫學博士 文學博士 森鷗外先生著
安人安語
裝幀　川村清雄畫伯

第十五編　前田慧雲先生著
樂しい人生
裝幀　川村清雄畫伯

四六判特製美裝　定價各册金壹圓參拾錢　郵税各金八錢

世評一斑

◎國民新聞曰く、藝術を論じ、倫理宗教を說き、又文明を批評す、深き造詣と洗錬されたる行文と兩々相俟つて卷を措く能はざらしむ……

◎大阪朝日新聞曰く、卷頭の妄人妄語は、最近歐米文藝社會の新聲を傳ふると同時に鋭いアイロニーが現はれて居り故人長谷川二葉亭を追懐した一文には何とも云へないあつさりした而も温い情緒が溢れて居る、新舊の劇に對する理解された評論や、メエテルリンク氏の思想を說きハウプトマンの新作を論評した文章などは、是非一讀すべき忠實なる紹介である……

◎東京毎日新聞曰く、文壇の巨匠たる著者が最近二十年間に亘りて物せられたる名論卓說を蒐めたるもの、各篇皆著者の該博なる學識の横溢するを見る……

仁義地を掃ひて、道德方に廢頽せんとす、これ現代の趨勢に非ずや。憐れむべし、擧世煩悶懊惱して其の歸趨する所を知らず。此時に當りて、樂地を拓き、以て人を指示するに足るは、先生の本書を推さざるべからず。先生博學多識、諄々として說き、懇々として諭す。大道に徹底して趣味津津たり。之を讀む者、何人か嬉々として樂まざらん、又何人か樂觀裏に成功せざらん。『活修養』と共に修養の寶典處世の羅針盤なり。

◎發兌　至誠堂　東京市本石町　電話本局東三一　振替長京一六七　六六四四番

大正名著文庫

第十六編　文學博士 幸田露伴先生著
悅樂
裝幀　川村清雄畫伯

第十七編　加藤咄堂先生著
旅から旅
挿畫　盛城、石井、平福三畫伯

四六判特製美裝　定價各册金壹圓參拾錢　郵税各金八錢

世評一斑

◎時事新報曰く、雄偉高傑の人格者たる著者が博大高邁の學識を靈筆に載せ「悅」「樂」「不惑」「無欲」の四章を成す言辭珠玉の如く立意深邃醇乎として學を勸むる所眞に現代文壇の偉觀たり學識洽博一々其の出處を註記せるは著者の深切感謝すべく其他の文章並に滑稽談も著者の洽識を以て始めて成る所吾人は本書を目して大正の新勸學篇と謂ふに躊躇せず學生諸子に取りて以て新秋研學の資にせんことを切に薦む……

◎萬朝報曰く、學を修むる者の爲に個中の滋味を說けるものにして老婆心且つ嚙み且つ味ふべし後半は日頃書き溜めたる隨筆を一括し遙かに「獨言」「長語」に對す。……

世評一斑

◎國民新聞曰く、雄偉高傑の人格者たる著者が博大高邁の學識を靈筆に載せ「悅」「樂」「不惑」「無欲」の四章を成す言辭珠玉の如く立意深邃醇乎として學を勸むる所眞に現代文壇の偉觀たり學識洽博一々其の出處を註記せるは著者の深切感謝すべく其他の文章並に滑稽談も著者の洽識を以て始めて成る所吾人は本書を目して大正の新勸學篇と謂ふに躊躇せず學生諸子に取りて以て新秋研學の資にせんことを切に薦む……

◎萬朝報曰く、學を修むる者の爲に個中の滋味を說けるものにして老婆心且つ嚙み且つ味ふべし後半は日頃書き溜めたる隨筆を一括し遙かに「獨言」「長語」に對す。……

◎國民新聞曰く、雄偉高傑の人格者たる著者が博大高邁の學識を靈筆に載せ「悅」「樂」「不惑」「無欲」の四章を成す言辭珠玉の如く立意深邃醇乎として學を勸むる所眞に現代文壇の偉觀たり學識洽博一々其の出處を註記せるは著者の深切感謝すべく其他の文章並に滑稽談も著者の洽識を以て始めて成る所吾人は本書を目して大正の新勸學篇と謂ふに躊躇せず學生諸子に取りて以て新秋研學の資にせんことを切に薦む……

◎東京報知新聞曰く、「山水美論」に於て繪畫の文能く自然の美觀を描き得「江山の傳說」にて各地の口碑傳說を採錄し「名蹟史蹟」に於て宗教文學其の他趣味ある史上の事蹟に及び終りに「東京風俗」「風土人情」の二篇に於て東京を中心として各地の風土人情の測察に及ぶ著者二十年來旅から旅の生活は足跡殆んど天下に遍く其の親しく見聞する所之を典籍に證し獨得の才筆記述頗る興趣ありまた以て著者の所謂「流風遺俗を見る」の資とすべし挿むに素明、柏亭、百穗三氏の畫を以てす。……

◎發兌　至誠堂　東京市本石町　電話本局東三一　振替長京一六七　六六四四番

大正名著文庫

第十八編

幽芳集

菊池幽芳先生著

裝幀 挿畫 川村清雄畫伯

第十九編

放言錄

浪六先生著

裝幀及口繪著者自作

四六判特製美裝 定價各冊金壹圓參拾錢 郵稅各金八錢

文壇の權威たる幽芳先生が佛國留學中に於ける見聞小品より最近の作品に至る近業を網羅せるもの、短篇小說あり、飜譯文あり、小品あり、紀行あり、觀察あり、一たび幽芳先生の筆にかゝる時皆一種のチャームを有し、讀者を魅し去らずんば止まず。蓋し近來に於ける絕好の讀物なり、幽芳先生曩に渡歐の途に上るや、梨本宮妃殿下と御同船の榮を得、殿下の知遇を辱うして「賀茂丸より」の一篇成る、日本皇室の御女性中最も美しくして機智縱横に渡らせらるゝ妃殿下を中心とせるその樂しく華やかなる航海日誌また收めて卷尾にあり。

內容目次一斑

停電▲歐洲の列弱▲癩羅の解▲握手▲奇習▲大膽▲監獄の內外▲美人▲停車場▲秋▲蛟に贈ろの文▲已むを得たし記辭世▲避暑避寒▲馬鹿らしし▲あやふや人形▲子寶▲立腹▲失敗▲河豚▲鮫鰊▲鰹▲反故▲寄生蟲▲懸想文▲情死▲來客▲夫婦喧嘩に關して▲友人の不和に對して▲我知足▲戀▲びッくり▲病中の感▲妻▲辻占▲感情▲蛙▲寄附▲旅行記▲言文一致▲今昔の感▲貞操問題▲我國の一大文章▲いろは俗諺▲明鏡▲坐談一束

人の言はんと欲して言ひ得ざるところ、言ふを憚り言ふを恐れて口に吐き得ざるもの、之を社會一般人生全部に涉りて遺憾なく最も大膽に無遠慮に吐き出せしもの即ち本書なり。

發兌 東京市本石町 至誠堂 電話本局長三六六六番 振替東京一七四四番

大正名著文庫

第二十編

西遊スケッチ

法學博士 和田垣謙三先生著

口繪及挿畫 川村、德永、澁谷三畫伯 原色版、寫眞版數葉

第廿一編

うき世 一卷

柳川春葉先生著

口繪挿畫 鰭崎英朋畫伯 表裝見返 杉浦非水畫伯

四六判特製美裝 定價各冊金壹圓參拾錢 郵稅各金八錢

世界未曾有の大戰亂未だ收まらず苟も志ある者誰か魂を歐洲の天地に馳せざるものあらんや。和田垣博士曩に歐洲諸國を漫遊せらるゝや、其雄偉の人格、該博の學識、縱横の才氣、犀利の觀察は到る處外人を驚歎せしめたるが、本書は即ち其間に於ける博士の感想錄にして夙に江湖の翹望せし處のもの、各國の風俗習慣趣味藝術等に亘り片言猶よく其の微を開き、篇々特殊の光輝と芬香とに富み、又博士の獨壇たる短篇——佳話格言詩歌飜譯等二百餘篇を收め、諧謔、警語、讀者をして或は哄笑せしめ、或は感泣せしめ、才華煥發星の如く、興趣横溢雲の如く、咳唾悉く珠を成す。兎糞錄、吐雲錄に於て門に及び堂に上りたる諸君は更に本書に於て博士の室に入らざるべからず。

本篇は大阪毎日、東京日日兩新聞に連載して滿都の喝采を博しつゝある春葉先生最近の一大傑作なり、落魄せる華族の令孃を渦中に投じて之に寡慾恬淡の父親、孝悌至情の弟、腹に一物ある惡漢等を配し家庭の裏面、周圍の出來事、義理人情の波瀾葛藤より數奇なる運命に飜弄せらるゝ可憐なる令孃早苗の苦心慘憺たる心理を描出して曲折變化を極め、愈々出でゝ愈々奇なる人生の祕曲は先生の靈筆によりて飽くまで讀者を魅し去らずんば止まず、家庭小說の上乘なるものとして之を江湖に推薦す。

發兌 東京市本石町 至誠堂 電話本局長三六六六番 振替東京一七四四番

大正名著文庫

夏目漱石先生著
第廿二編
金剛草
裝幀　津田青楓畫伯

柳川春葉先生著
第廿三編
うき世　二卷
口繪及挿畫鰭崎英朋畫伯
表裝見返杉浦非水畫伯

四六判特製美裝　定價各册金壹圓參拾錢　郵税各金八錢

漱石先生は日本文壇の最高權威なり。其幽遠なる思想、宏博なる學術、靈活なる筆端より流出する藝術は尤も高級趣味を充たすに足る。本書は此最高藝術のエキスとも稱すべき者にして、既往十年に亘る先生の新著作中より尤も會心德意の代表的傑作のみを選集し、以て評論、講演、小品、小説の四種に分類せり。「素人と黑人」「ケーベル先生」等未だ何れの書にも收めざる新文字少からず）されば本書一卷を讀めば、以て先生十年の努力に成れる藝術と思索の核實を味ふに足るべし。苟も現代の文藝と思潮に志あるの士は乞ふ速に一本を購ひ給へ。

可憐の少女早苗の運命は如何になりゆきしぞ！　娘持つ親は讀め、兄も弟も姉も妹も來て此浮世の痛ましき旋轉を見よ、悲愁は歡喜に次で來り、憤怒は哀憐と共に生ず、叙述の展開と共に讀者の感情も今や高潮に達せずんば止まず、曩に大阪浪花座に上場せらるゝや京阪人士爲に熱狂し、又東京明治座に開演せられ或は活動寫眞に撮影せらるゝなど滿都好劇家の期待を實現し、劇界人氣の焦點となる、劇中省略せられたる幾多の波瀾紛糾は本書を俟つて初めて瞭然たり、劇を觀たる諸君も觀ざる諸君も共に本書に於て劇以上の劇的情緒に陶醉せらるべきなり。

發兌　至誠堂　東京市本石町　電話振替本局東京一三六七　長六六四四番

大正名著文庫

文學博士
井上圓了先生著
第廿四編
迷信と宗教
裝幀　中村不折畫伯

柳川春葉先生著
第廿五編
うき世　三卷完
口繪及挿畫鰭崎英朋畫伯
表裝見返杉浦非水畫伯

四六判特製美裝　定價各册金壹圓參拾錢　郵税各金八錢

本書は博士獨特の研究にかゝる迷信と宗教との本領を明示せる新著なり、先づ西洋の迷信より説き起し、印度、支那、朝鮮、臺灣、琉球及び五畿八道に於ける各種の迷信に就き、博士が實地見聞せる事實を列擧し、之に説明を附し評論を加へ、最後に迷信の暗雲を破りて宗教の光明を開かれたれば、家庭教育社會教育の好資料たるは勿論民間に於ける平素の座談茶話の修養的材料としても亦最適必備の名著なり。

深刻なる描寫の筆は本書に於て其極點に達し、悲絶慘絶浮世のどん底を讀者の眼前に顯はし來る。窘窮更に窘窮老父途に狂毫し、家貧にして孝子あり文雄の至情鬼神を哭かしめ、弱き者破れ易く早苗將に高恭に嫁せんとし、美しき者痛み易く名女優の人氣地を掃ふ。萬事已に休みたる乎、否、聞け快漢栗原の力ある絶音！更に聞け天の一方に空中征服のプロペラの響――眞木原式飛行機の成功――眞木原增穩の大成功！今や極端なる暗黑は極端なる光明に轉ぜり、すべての面上狂喜の色あり、枯木再び花開き實を結ぶ。

發兌　至誠堂　東京市本石町　電話振替本局東京一三六七　長六六四四番

大正名著文庫

杉村楚人冠先生著
第廿六編
弱者の爲に
裝幀　名取春僊畫伯

村井知至先生著
第廿七編
聲
口繪及裝幀　齋藤松洲畫伯

四六判特製美裝　定價各册金壹圓參拾錢　郵税各金八錢

啞蟬の聲も得立てゞ僅に羽ばたきながら、殺され行くなあはれと見て、世の啞蟬の爲に、自ら代りて世に訴へんとしたるが此の書なり。つれなき人を怨める女、まがつみに泣ける男、其の弟の爲とて病める身を扶けて情を賣れる姉、其の子をはぐくまんとて、あらゆる迫害を忍べる若き母、豪族の爲にたぶらかされんとしつる寡婦、悍婦の爲に國を追はれし詩人、戰亂のちまたに漂泊ひたる俳優などの、とりどりに著者の筆を借りて訴へ出づるを聞け。シヽリーの妖魔が歌ふ歡樂の音色にのみ耳傾んは禍なるべし。時には啞蟬の羽ばたく音にも耳とめ玉はずや。

聲!! あゝ是れ何の聲ぞ! 憂國の聲か! 悲憤の聲か! 慷慨の聲か! 將又天の聲か! 皆然り。皆然り。著者が心鏡に閃き來れる萬象に對する直感の叫びは、卽ち凝りて此の「聲」となれり。著者は是れ當代の思想家にして、又宗教家たり。其の吐く所の聲は、學術に非ず理義に非ず、實に天賦心靈の叫びなり。其の文は明快流暢にして、其の詞句は正鵠嚴烈、社會、教育、宗教、時事、各般の問題は總て本書中に說破さる。正に是れ時代革新の第一聲たり。

發兌　東京市本石町　至誠堂　電話振替東京一六六三　長局本　六七四四番

大正名著文庫

大町桂月先生著
第廿八編
杖の跡
裝幀岡本一平畫伯
口繪插畫一數十葉

大庭柯公先生著
第廿九編
世界を家として
裝幀岡本一平畫伯

四六判特製美裝　定價各册金壹圓參拾錢　郵税各金八錢

大町桂月先生の健脚天下に鳴る、其の紀行文の面白きことまた天下獨壇なり、杖の跡は實に最近の作に係る、幾んど皆未だ世に現はれざる新作、而かも普通の紀行文の常套を破りて、滑稽人の頤を解き飄逸人をして超世の感あらしむ、大正の膝栗毛とも稱すべき斬新奇拔の珍書、東京を中心とし關八州其他の勝地を洩すなし。一面は趣味の讀物として異彩を放ち、一面は忠實なる案内記として天下無類なり。

これ大庭柯公先生の旅行上の感想記なり先生足跡五大洲に遍ねく、當代操觚者中眞に東西南北の人なり。加ふるに獨得の感想と多角の趣味とを以てす、若し其の文字に至りては山動き水流るゝの趣あり書中收むる所、『浴衣がけ』『萬里行』『鄰境遊記』『長篇あり、『偉大なる鄰人』『海外出稼婦』『マニラの夜』『キャビテン・クックの上陸地』等の短篇あり、共に皆『趣味の地理』を談ずるもの、山水を愛し旅行を好むものゝ好伴侶なり。

發兌　東京市本石町　至誠堂　電話振替東京一六六三　長局本　六七四四番

辭書界の權威

井上十吉先生著

井上英和大辭典

五萬部限　特價貳圓廿錢　郵稅拾貳錢

頁六十二百三千二文本數紙・萬廿數語
分一寸三横・分六寸五縱・頁十數錄附
□錢拾五圓貳金價定□製特スーロノ總

井上十吉先生心血を濺ぐ實に七箇年

眞個絕大なる精力の結晶體として本書大成す

英語學上必須の三大條件

第一に自己の努力
第二に良師の誘導
第三に本書の使用

こは動かすべからざる眞理として學者の一致する所なり第一第二は云ふまでもなく第三また決して誇張の言に非ず確固たる事實なり何となれば自己と良師とに次では辭書の効力を最とすべく而して辭書中の辭書は實に井上英和大辭典なれば也

▲全國中等各學校に於いて指定辭書たるの光榮を受く

何故に本書は辭書中の辭書なるか

◎語數の豐富　◎新語の包有　◎譯語の明確　◎發音の正確　◎文例の饒多　◎檢索の至便　◎註解の懇切　◎編纂の巧緻　◎熟語の網羅　◎印刷の明　◎術語の詳解　◎製本の堅牢

なる點に於て一切の類書に超絕するが故なり

英學界の福音

井上十吉先生著

井上英和中辭典

五萬部限　特價大提供

スーロク總分五寸二横・寸五縱
字活ルペンナ式新・便至帶携・製特
付名假・頁餘百四千壹數紙・明鮮刷印
挾畫五百餘個・定價金壹圓參錢拾

父兄諸君！子弟に辭書を與ふる時第一に注意すべきは內容の選擇に在り

本書が中學生用の辭書として完全無缺なるは弊堂の確信して疑はざる處本書の諸君に於けるは恰もプロペラの飛行機に於けるが如し殊に出色の特徵として誇るべきは中等學生諸君に對する懇篤なる先生の溫情が書中到る處に流露せることなり單に文字を排列せる冷かなる辭書としてよりは寧ろ溫かき師友として座右寸時も離すべからざるものならむ

▲實費特價金壹圓拾錢　郵送料金八錢

本書の特色

◎教科書中の語句と網羅　◎文法上說明の周到懇切
◎假名應用發音法の完成　◎略語他國語の本文排列
◎譯語の平易解釋の正確　◎重要の固有名詞の詳解
◎熟語及び慣用句の夥多　◎振假名と挿畫との豐富
◎最新語の豐富なる收載　◎內容の充實容積の輕便

最新最善最便最廉の完全なる英和辭典現はる

廣然たる大著縮刷されて繙讀に至便となる

文學博士 三宅雪嶺先生著

改訂縮刷 想痕

書を讀むは猶山に登るが如し、其愉快は眼界を濶大にし氣宇を高朗にするにあり。山に登らば當に大山に登るべく、書を讀まば須らく良書を讀むべし。三宅雪嶺先生は嶄然思想界に峙立す其識は天漢を貫き其學は地表を掩ふ。玲瓏の人格巍々たる德操、雪嶺と號するの有名有實たるを見る。先生の人格が一代の敬仰を受け先生の著書の上下に渴讀せらるゝ誠に所以ある哉。先生の著皆學術界と思想界の權威たりと雖も、最も良く文明批評家たる先生の特色を代表する者は『想痕』を推して第一とす『想痕』は先生三十年間の思索の結晶にして宛然『領全集』の觀あり篇を分つこと七篇章篇約三百、山濤海嶽變幻の妙を極め筆端白雲を起し紙上清風を生ずるの感あり。而して其取材の廣汎にして多趣多端なる有らゆる階級の有らゆる人士をして必ず會心の文章を發見せしむべく一文を讀む毎に一段の識見を增すを覺えしむべし。加ふるに博士の文は獨創的にして濟新の氣充溢し含蓄極めて深きを以て文に志あるの士日夕本書を精讀せば必ず著しき進境を見るを得べし。

總クロース特製天金箱入美裝携帶至便
紙數壹千餘頁全
定價壹圓六十錢
郵稅金八錢

◎發兌 東京市本石町 至誠堂 電話振替 本局東京 三六六七 長一六四 番

加藤咄堂先生著

修養小品

▲日常座右の寶典▼

四六判特製全一冊
紙數五百頁
定價金壹圓貳拾錢
郵稅金八錢

修養の問題は古今に通じ、一句乾坤を定め、一言天下の法となると雖も、其應用は時と共に異にして新らしき時代には又新らしき修養を要す。本書は著者が多年の研究を傾けて新時代に適應すべき根本義に據り、現代生活に必須なる力の修養を絶叫し、活社會に活運動を試むべき素地を示し、或は古今の學說を紹介し或は東西の事例を引用し、之を行るに瀟洒明快の文を以てし、珠玉を錦繡に包み實益を趣味の中に寓し、別に心學を提唱して通俗平易なる道話を試み談笑の間に甚深の理を會得せしむる著者獨得の手腕を發揮す 請ふ一本を購うて其言の誣ならざるを知れ。

大町桂月先生著

修養の礎

▲完全無比の國民道德經▼

菊判特製美裝
紙數壹千頁全一冊
定價金貳圓貳拾錢
郵稅金拾貳錢

歐米諸國の家庭に聖典無きはなし、我國には神道あり儒教あり佛教あり武士道ありて道德の基礎を爲し居れど人々戸々必ず備へ置くといふ經典的修養書なし。先生修養を說く數十年茲に見る所ありて本書を著はさる。日本國民に必須なる修養の條目を網羅して之を說明し、歷代賢哲の名說を錄して之を評釋し、各條目毎に古今の實例を擧げ、名文名詩名歌軍歌琵琶歌迄も引用し修養と相待つて趣味津々人々をして感奮措く能はざらしむ。名說實例は漢洋に亘るも我國を主とし古來の訓言は一も漏さず、以て國民道德の由る所を明にす。眞に戸々必備の修養の寶典完備せる國民道德經也。

戰線に立ちて（一名）（獨逸肉彈）

參謀總長 上原男爵閣下序　獨逸陸軍大尉 ヘッケル著　▼芹澤登一先生譯

獨逸大文學者の從軍實戰記出づ
是れ正しく獨逸の肉彈なり

四六判上製美本　紙數三百頁全一冊
定價金壹圓八錢　郵稅金壹圓八錢

本書は獨逸が戰を開くや直に召集せられたる著者が自ら戰線に立ちて手記せるものにして時事新報紙上に連載し讀者より多大の喝采を博せしも出征より運輸交通作戰給養衛生の各項に亙りて其實相人の僞らざる事實に周到なる筆致を以て極めたり殊に軍人たる著者は又獨逸文學の大家として既に世界的聲名を博せる人として其叙述は平凡なる從軍記の如き無味乾燥なるものにあらず從つて觀察鋭敏筆致巧麗加ふに正側縱橫より具に鐵火裡の眞相を描出し就中塹壕戰の實況を說き來りては慘絕愴鬼氣紙上に漲り宛も其の境地に臨むが如き感あり正に是れ獨逸國の肉彈とも見るべきなり

杉村楚人冠先生著

戰に使して

▲口繪及挿畫

世界的大動亂の詩的反影

コロタイプ版、ツンク版原色版、石版、寫眞版廿五葉

四六判特製頗美裝　紙數五百數十頁全
定價金壹圓六拾錢　郵送料金八錢

「戰に使して」は著者が英獨開戰と同時に朝日新聞より倫敦に特派せられ、滯英約半年の間具さに戰時の英佛を視察したる時の記事なり。先づ筆を墨太の下線の一湖畔に避けて老母と平靜なる自炊生活を樂めるに起し、突如として社の召還電報となり渡米となり渡歐となり倫敦滯在となり佛國旅行となり、クリスマスから正月にかけて英國田園の視察となり、其末遂に白耳義訪問となつて白國皇帝及皇后陛下の謁見を賜はりし次第に及ぶ。敢むる所約七十篇、公報にも表はれず戰報にも出でざる歐洲戰爭の光景を叙して人をして身其地に在るの想あらしむ。

最近文壇の二名著

菊池幽芳先生作　▲口繪及挿畫　鏑木清方畫伯

毒草　お品の卷

菊判箱入洋裝頗美本　紙數三百八十頁
定價金壹圓三拾錢　郵送料金十錢

本篇は幽芳先生の一大傑作にして而かも先生從來の諸作と全然その選を異にし、其採材人物の個性、描寫の方法等眞に別樣の感あり。內容は田園に起れる一個甚深の感興を伴ふ犯罪事件を取扱へるもの、何物をも燒かんとする熱狂的戀愛、恐るべき病的嫉妬、異常なる婦人の愛着心、殊の如き獻身的友愛、生理的缺陷を有する女の驚くべき決心等を描き、人性の默的方面と靈的方面とは遺憾なく本書一篇の裡に展開すべく其描寫の犀利なる刺戟の深刻なる人をして戰慄せしめずんば止まず、辛辣骨を抉り鬼氣人を襲ふもの毒草の如きは、先生の作中曾て見ざるところにして、小說壇上常に新境地を開拓しつゝある先生の努力は、本篇に於て現はれたりといふべく、幽芳先生近時の大作として敢て毒草一篇を薦む。

浪六先生著　▲口繪コロタイプ版著者自畫

大正五人男

菊判洋裝美本　紙數三百頁全一冊
定價金壹圓　郵稅金八錢

二十餘年前に讀書界を震憾せしめて今なほ出版を重ねつゝある當世五人男の著者浪六先生茲にまた新たなる大正五人男を世に出さる

◉發兌　至誠堂　東京市本石町　電話局本長　振替東京三一六六七四　番

新譯漢文叢書第壹編

大町桂月先生譯評

新譯

日本外史

袖珍三五形美本
定價金壹圓五十錢

特價金壹圓三拾錢
小包料金八錢

本書は近世の偉人絶代の文豪頼山陽が一生の心血の凝る所識見卓拔筆力雄麗古英雄一々紙表に生動し干戈の聲怳として机上に起る成敗の跡火を睹るが如く大義爲めに明かに天下の士氣爲めに振ふ實に東西無類の散文叙事詩なり現代の文豪大町桂月先生拮据三年之を今の文に移し難解の字には解釋を附し治亂興亡の因る所を尋ねて奇拔痛快の批評を加ふること數百條山陽が當時を憚りて言ひ得ざりしことまで遺憾なく顯はされて桂月先生獨得の妙を極め一讀人をして血躍り腕鳴らしむ以て歴史を知るべく以て士氣を勵ますべく以て文學を味ふべし天下有爲の士此書を閑却して自ら寶を捨つる勿れ

新譯漢文叢書第貳編

陸軍教授
友田宜剛先生評解

新譯評解

文章軌範

本文新式ゴシック活字
袖珍三五形携帶至便

定價金壹圓廿錢
小包料金八錢

作文に志す人は必ず文章軌範を讀まざるべからず當代作文教授の泰斗友田宜剛先生が十年の心血を濺ぎたる研鑽の光燦爛として新譯評解文章軌範は世に出てたり其の譯其の解其の評最も斬新最も適切優に現代文章の模範化したる點に於ては比類無き無限の光榮を擔へり今其の特長を一言せんか◎從來の漢文讀みの通弊たる文法の誤りに深く注意し假名一字をも疎略にせず本文を離れずして而も純粹の大正文學化せしめたること其一也◎各文の始めに作者の略傳解題大意等を附し讀者をして興味津々喜んでその文を迎へしむるを其二也◎各節各段に丁寧懇切なる解釋通解文法を附し難語を解せしめ殊に通解は口語文及び談話演説の模範たらしめ文法は各編末に附したる總評と相俟つて和漢の文典東西の修辭法により切實に作文法を教へたる事其の三也◎更に上欄には本文を揭げて對讀に便じ且之れにも古賢の興味深き評語を網羅し讀者の趣味を喚起する事其四也◎以上の特色を具備する本書は蓋し類書中の白眉と云ふべし

發兌 東京市本石町 至誠堂 電話本局長三六六六番 振替東京一七四四四番

新譯漢文叢書第三編

濱野知三郎先生註譯

新譯

孟子

本文新式ゴシック活字 附 索引
袖珍三五形携帶至便

定價金壹圓
郵税金八錢

◎讀賣新聞評 孟子の全文を和譯して之に註解を附し上欄に其本文を揭げ卷末に五十音に基く索引を添へ書中の一語を知る時は直ちに其全文を求め得るの便に供したり其和譯の正當なる註譯の穩健にして平易なる殊に孟子の書は其議論の奇拔なる其文章の雄健簡潔なるは支那文學中推して第一位に置くべき者青年子弟の讀物として最も現代に適切の者就中著者の苦心と見るべきは索引の編纂と配列とに力を用ゐ此國民修養の一大格言集より隨意に欲する處の語句を索出し得るは何よりの愉快と

◎やまと新聞評 其文章は實に奔放自由を極めいつまでも生氣の潑溂たる不朽の天品世界の大文學書である…製本亦堅牢と

新譯漢文叢書第四編

大町桂月先生譯評

新譯

日本樂府

本文新式ゴシック活字
袖珍三五形携帶至便

定價金六拾錢
郵税金六錢

當代に異彩を放てる大町桂月先生嚮きに日本外史を譯せられ、今又頼山陽の咏史日本樂府を譯するのみならず、之を釋し之を評せらる、徹底の見、老熟の筆明快を極めて、渾然として桂月一流の名文となり、朗々誦すべく、尊王の詩人又愛國の詩人として古今に獨步せる頼翁の氣魄と筆致とを躍動せしむ、以て日本歷史を知るべく以て士氣を鼓舞すべし。日本男兒之を讀まば必ずや案を拍つて起たん

發兌 東京市本石町 至誠堂 電話本局長三六六六番 振替東京一七四四四番

新譯漢文叢書第五編

大町桂月先生譯評

新譯 日本政記

袖珍總クロース 天金箱入美本

定價 金九拾錢
郵稅 金六錢

頼山陽前に日本外史を著して武門の興廢を說き、後に日本政記を著して朝廷施政の大綱を明にせり。先年喧噪を極めたる南北朝問題の如きも翁が八十年前政記に於て既に解決したる所にして、兼ねて維新の一大原動力となりたる所なり。殊に政記は翁が死に至る迄も手刪して止まざりしものにして、翁が尊王愛國の精神の形見なり。識見正大文章雄健、光鋩陸離として實に史界の一大偉觀たり。然るに從來世に行はれたる政記の板本は校訂粗漏にして誤譯甚だ多し。大町桂月先生茲に之を飜譯せられ、一々精密に誤譯を正し。難解の語に解釋を施し振假名を付し、先生獨得の痛快なる警評を隨所に加へて筆力縱橫、熱血筆端に迸り、翁と先生との氣骨相俟つて紙上に活躍し、錦上更に花を添ふるの觀あり。日本政記の面目茲に一新す。日本國民必ず一本を備へざるべからず。

新譯漢文叢書第六編

久保天隨先生譯評

新譯 十八史略

袖珍總クロース 天金箱入美本

定價 金九拾錢
郵稅 金六錢

上下五千年、興亡八十餘朝、この間治亂成敗の跡、必ず其始終を審にし、記述その要を得、簡明切當、記述に便なるものを十八史略となす。その書、從來世に行はれ、今に至りて廢せざるもの、豈に偶然ならむや。本書は譯者が特に意を用ゐて、之を時文に飜せしものにして現代國語の文法に循從し、且つ漢文に特殊なる語勢の緩急を併せ移し、難解の字句には、すべて注脚を施したれば、讀者は熟路に就いて輕車を驅るが如く、容易に、全篇を通覽するを得べく、卷中に挿入せし數百條の評語は、奇警峭拔その史實と相待つて、覺えず案を拍つて快哉を呼ばしむ。加之、篇首には、精細なる解題を載せ、卷末に便利なる新式の索引を添ふ。されば、この書を讀むもの、一は以て容易に東亞ツラン人種の起伏消長を審にするを得べく、一は以て漢籍攻究の指針となすべく、その裨益、もとより少々ならず敢て江湖の一讀を勸む。

◉發兌 至誠堂 東京市本石町 電話振替本局東京六六四四番 長三一六七番

新譯漢文叢書第七編

友田宜剛先生評解

新譯評解 續文章軌範

本文新式ゴシック活字 袖珍三五形携帶至便

定價 金壹圓八拾錢
郵稅 金壹錢

續文章軌範は、正文章軌範と相待ちて古今作文書の雙璧、古人が心血を濺ぎたる千古の名文、陸離として光彩を放てり。文に志す者は必ず之を座右に致して日夕に師とし友とすべし。作文教授の泰斗友田宜剛先生は、刻苦研鑽多年の螢雪を積みて之を完全なる現代の作文模範化せられたり。今其特長を一言せんか、從來漢文讀方の通弊たる文法の誤に深く注意し本文は新式ゴシック振假名付にして難解の字には懇切なる解釋を施し、各文の始めには作者の略傳を附し篇末には文法と論評と相俟つて和漢の文典東西の修辭法より切實に作文法を敎へ、上欄には原文を揭げて對讀に便ず。要するに文章界は本書を得て更に五百燭光を揭げたりと云ふべく正續彼此相待つて日月を並べ懸けたるが如し。冀くは江湖の諸彦一書を座右に備へ給へ。

新譯漢文叢書第八編

大町桂月先生譯評

新譯 國史略

袖珍總クロース 天金箱入美本

定價 金壹圓二十錢
郵稅 金八錢

萬世一系の天皇を戴ける神州に生れながら神州の尊き所以を知らず三千年金甌無缺の歷史の實質を知らず人心輕兆となり浮華となり尊王愛國の精神失せて士氣鈍磨せむとするは今の世の大患なり世の歷史教科書は唯歷史の骨組のみありて肉なし血なし歷史教育の宜しきを得ざる其大原因ならずんばあらず大町桂月先生茲に慨する所ありて先に日本外史日本政記日本樂府を譯され今又國史略を譯さる國史略は古來の諸國史の粹を拔き要を取り日本全史として最も國民的なること既に定評あり筆を開闢に創めて篇を聚樂第行幸に結びたるにても作者の精神を諒とするに足る二十年前迄は戶々に誦せられたるに拘らず漢學敎育衰へて此の名著も空しく閑却されんとす今大町先生之を譯し之を解し之を評して有益なる貴重なる國史略茲に復活す

◉發兌 至誠堂 東京市本石町 電話振替本局東京六六四四番 長三一六七番

新譯漢文叢書第九編拾編

水滸全傳

久保天隨先生譯補

上下全二冊

袖珍クロース天金箱入美本

定價 各金壹圓貳拾錢
郵稅 各金八錢

水滸傳は實に支那小說中の隨一たり唯憾むらくは未だ好譯本を得ず坊間流布の書は馬琴僅に筆を十一回に絕ちて十中の九は高井蘭山が岡島冠山舊譯の錯誤脫漏を踏襲せるのみ豈日本文壇の一大恥辱に非ずや我天隨先生深く之を慨し拮据數年茲に譯本新に成る先生が支那小說に造詣深きは世既に定評あり其譯文の妥當にして流麗暢達なる固より辯を俟たず波瀾萬丈骨鳴り血湧くの快文字は本書に依りて其眞骨頭を傳ふるを得ん

新譯漢文叢書第拾壹編

論語

大町桂月先生譯解

全拾冊
縮刷全壹冊

袖珍クロース天金箱入美本

定價 金壹圓廿錢
郵稅 金八錢

孔子は世界三聖の一也論語は孔子の遺訓也東洋思想の本系也日本道德の敎典也論語を解せずんば東洋を解すべからず論語我國に入りて既に二千年我國民は能く之を咀嚼し之を活用せり孔子の敎は本國に行はれずして却て日本に行はれたる觀あり然るに世には所謂「論語讀みの論語知らず」なる者少なからず道德の根蔕に古今なし唯風俗人情時勢の異動を察して論語の眞意を解するに非ざれば折角の經典も死物となり害物となる論語を解くには活眼を要す大町桂月先生心血を濺ぐこと二年有半絕代の快筆を揮ひて活眼を以て活書を心解し茲に新譯論語成る譯するのみならず之を詳解せり先生の眼識筆力相俟ちて三千年來の經典新に大正の世に活躍す

◉發兌 東京市本石町 至誠堂 電話振替東京局長三一 六六七四 六六四四番

新譯漢文叢書第十二編十三編

演義三國志

久保天隨先生譯補

縮刷全二冊

紙數 上卷千百頁 下卷一千頁

袖珍入天金全本特製二冊 箱入美本 正價 金六十錢 郵稅 各金六錢

新譯漢文叢書第十四編

大學中庸

濱野知三郎先生譯解

縮刷全一冊

袖珍入天金本特製一冊 箱入美本 正價 金六十錢 郵稅 各金六錢

智仁勇の精華を極む
軍國男子必讀の書

三國志は支那小說の隨一たる蜀魏吳天下を三分し一代の英俊豪傑亦茲に集り智を爭ひ勇を鬪はす實に天下戰亂の一大奇局たり支那文學に造詣深き天隨先生新に流暢なる快筆を揮ひ險遊なる原書を譯して面目を一新す卷を繙けば琴聲として刀戟相摩するの聲を聞くが如く光焰萬丈血躍り腕鳴る必ずや案を拍つて起たん

大學は儒學の原理を說明し中庸は孔門傳授の心法を述ぶ共に千古不磨の經典たり本書は何人にも分り易きを主とし本文に訓點を附け更に總振假名の讀方を示し次に懇切なる註釋を施し本文は新式ゴヂック活字を用ゐ上欄には原文を揭げて對讀に便す常に本書を懷中せば人格を成就して必ず過なきに至らむ

◉發兌 東京市本石町 至誠堂 電話振替東京局三一 六六七四 六六四四番

一大奇書浪六自叙傳

浪六先生著 我五十年

◆口繪著者自書自畫 コロタイプ珍品拾數葉

四六版特製美裝
紙數 四百六十頁
定價壹圓五拾錢
郵稅 金十錢

事實は小説よりも奇なりと云ふ語を始めて浪六先生の「我五十年」に證明せらる生れて今日に至るまで人生の波瀾曲折を極めし先生の一代記を最も大膽に最も露骨に告白せるもの机上の筆を以て書きしに非ず現在の身を以て著はせる五十年間の生證文にして所謂文士なる者の自叙傳に非ず

世評一斑

◎やまと新聞曰く、自叙傳と云はゞ一言にて足るも、飽くまで浪六式の自叙傳にて、履歴書の引き伸しとは選を異にす。例へば護謨毬の如く、打てば返る一種の彈力ある文章、つい釣込まれて一卷を讀み了る……

◎報知新聞曰く、いはゆる文士の文字以外いはゆる机上の理想以外の聊か自己の現實を以て青年諸子のため他山の石たらんとす……とは著者が其序文中に記する所にして波瀾多き著者の一生は世上青年の教訓たるもの多きと同時に興味津々たる好讀物たるを失はず……

◎時事新報曰く、之を讀みて驚くべきは「三日月」によつて突如として一流大作家となれる浪六氏が其出世の奇蹟なる如く如何に其生涯の奇變縱横なるかに在り沈多一部の小説と雖も是程に奇異にして浮世の人なるべし而も才機縱横之を突破し來れる實に中には有名なる傳奇小説を成す迄の波瀾重疊の經歷は陳腐なる名を讀むよりも遙に面白味がある……

◎傑作家となれる浪六氏が其出世の躍なるか如何に其生涯の變縱横なるかに在り沈多一部の小説と雖も是程に奇異にして浮世の人なるべし而も才機縱横之を突破し來れる實に中には有名なる「五人男」の種も明かされあり此著は近頃無類の奇書快著……

◎太陽曰く、著者が堺市の俠客の孤兒たる生立より「三日月」の一篇により文壇に名を成す迄の經歷は陳腐なる傳奇小説を讀むよりも遙に面白味がある……

全編いやしくも一字一點の架空文字なく多年浪六先生の小説を讀みしもの必ず本書を讀まざるべからず。

◎發兌 東京市本石町 至誠堂 電話本局東京 長三一 長六七 六六四 六六番

歡迎如湧

縮刷 浪六全集

新式ポイント活字印刷
袖珍特製天金箱入美本
◎第一編 ◎第二編
◎第三編 ◎第六編
◎第七編 ◎第九編
定價 各壹圓卅錢

各編收むる所悉く是れ浪六先生が傑作中の傑作として天下の讀書界を風靡したる者裝幀の美は机上を飾るべし携帶の便は旅行に伴ふべし幾回之を讀むも飽く事を知らざるべし内容の豐富と價格の至廉亦他に比類なかるべし

◎第四編 ◎第五編
◎第八編 各 冊
定價 各壹圓拾錢
郵稅 各冊 金八錢
印刷鮮明 携帶至便

第一編目次
當世五人男 上田力
同 後編 川上三吉
黒田傳次 同 後編
同 後編 同 後編
同 續編 同 續編
同 續編 倉橋幸藏
最後の黒田傳次 吉田雄藏
同 後編 同 後編
同 續編 花車 編

第二編目次
第 八 前 編
第 五 後 編
八軒長屋 編
八軒長屋 編

第三編目次
しなさだめ

第六編目次
鬼あざみ 最後の 岡崎俊平
やまと心 同 後編
日本武士 魚屋 第八編
武士呆 助左衛門
金剛盤 宋助左衛門
後編 古賀市 編
武士氣質 正編 續編

第七編目次
居家處世 川柳自作
人間學 裏の世界
◎男 ◎同 後編
◎男 ◎高倉長右衛門
一疋 編
◎同 後編

第九編目次
山

澁澤男爵閣下序
新渡戸博士序
蘆川忠雄先生著
愛子教養

○父の書簡

裝幀 川村寅伯

増訂縮刷袖珍美装

定價金一圓二十錢 郵税

内容概目

第一、品性の偉大なる勢力、第二、常識の修養、第三、日常談話の要訣、第四、書簡の認め方、第五、筆蹟の疎放を誡む、第六、金錢の使用法、第七、儀容の整理、第八、世態人情の機微、第九、閨熟の作、第十、奮闘生活の效果、第十一、樂天思想の眞價、第十二、休養法、第十三、外國語學研究の活法、第十四、實務處理の眞髓、第十五、健全なる意志の修養、第十六、人生の幸福に達する道

發兌 東京市本石町 至誠堂 電話本局東長三一 振替東京六六七四 六六四四番

蘆川忠雄先生補譯

○交際規範 なかれ

袖珍美本 ダイヤモンド

定價金廿四錢 郵税五錢

「なかれ」は日常交際の要訣に就て簡潔明快の洗錬的文章を以て記述したれば此の書を伴侶とせば交際上の失敗を避くべし

「なかれ」は大人が讀んでも眞に缺くべからざる教訓を學ぶべき婦女子の爲のみならず青年學生及び疑なしとする洋食の食べ方洋服着用の注意交際談話に至るまで斬新なる二十世紀の紳士淑女の良師友なり

「なかれ」は流行の紳士淑女に必要なる作法品性風采を說くと共に勝れたる日新文明の紳士と田夫の差は「なかれ」を讀むと否とに因るのみなり

「なかれ」は最新式の意匠を凝らせるポケット携帶の袖珍美本にして青年諸君の爲めに交際應對の根本なる呼吸愛嬌を教へ人心看破の道等十五章に分ちて精細に說明するものにして此一冊は汽車電車の中にて暇ある毎に通讀せば其利益は計り難しと

蘆川忠雄先生著

○交際と應對

菊版特製全一冊

定價金五十六錢 郵税

學問伐倆共に勝れながら處世上失敗するは交際應對の拙劣に因るのみ本書は著者獨得の創見に基き其輕妙流暢なる才筆を呵して談話に關する注意及び談話術の要訣を說明せるものにして加ふるに著者の博學多識なる歐米最新の流行なる斯術の計法を加味折衷して錦上花を添へたり卑近と見做すべし成敗の基く所が大規模の計畫考察を却て大事を成すべし談話に關する思ひ切の完備あらずして一生の大事なり此書は此一卷を活用するに因りて一生の幸福成功の基を成すべし

蘆川忠雄先生著

○談話術修養

菊版特製全一冊

定價金壹拾貳錢 郵税

發兌 東京市本石町 至誠堂 電話本局東長三一 振替東京六六七四 六六四四番

蘆川忠雄先生著

○修養と人物

菊版特製全一冊

定價金壹拾圓 郵税錢

是れ著者獨得の人物養成論也修養を積んで怠らずんば何人も有爲の人物たるに至るべしとの見地よりして現今青年の最も要求する所を擧げ或は其缺陷とせる所に突進して之を敎示し精神的飢渴を滿たさしめ其明快の筆法を以て縱横無盡に論破せられたるものにして全篇雄大豪宕の氣滿ち一讀痛快淋漓の感に堪へず苟も處世修養と人物の大成に志ある青年諸君は本書に就て斬新有益の智識を享受せられよ

蘆川忠雄先生著

○勤儉の實踐

菊版全一冊

定價金六十五錢 郵税

奢侈輕佻の風は現代社會の一大缺陷にあらずや著者深く之を慨し其の痛快淋漓の筆を揮つて貯蓄を唱ふる見識は世人に一大警告を與ふ其の勤儉論と全然選を異にしたる陳腐なる道徳論を破して一々切要當一度本書を取つて之を熟讀せば奢侈の涙霽の徒も讀然として其の非を悔い勤儉力行の念勃

蘆川忠雄先生著

○時間の經濟

菊版全一冊

定價金六十五錢 郵税

文明の進歩と社會の發達に從ひ生存競爭は益々激甚となり其の最大根柢は金錢と時間の二者也世人金錢に至りては之に注意を敏なりと雖も時間の經濟に至りては其重大なるを知らざるなり

用途を實踐する者少し著者其明快縝密の頭腦より歐米最近の傾向に基き巧妙適切の時間經濟を案出し本書に於て詳細に之を說述して其精確機敏の活用して競爭場裡に立たんとする青年諸君は本書に因つて菊の智識を求めざる可からず

蘆川忠雄先生著

○修養座右錄

袖珍美本

定價金六十六錢 郵税

從來發刊せし修養書の多くは千篇一律にて舊套を襲ぬるに過ぎず隨て今日の生存競爭時代に應用すべき能はず獨り本書は此の著者の新鮮にして最も奇拔なる見地より現代青年の必須なる日常處世の心得大膽周到の態度經濟的觀念等哲人の大悟せる大達觀より痛快の斷案を付したる等用意周密の一讀卷末には名家座右訓を學び得らるゝもの下に其の氣伸暢無限の新智識と貴重なる處世訓を學び得らるゝもの天下に其の比なかるべし

發兌 東京市本石町 至誠堂 電話本局東長三一 振替東京六六七四 六六四四番

小松原前文部大臣閣下題字　樂翁公眞筆

◯天覽 白河樂翁 前編

碧瑠璃園著　齋藤松洲畫伯裝幀

定價金壹圓拾貳錢　郵稅金壹拾貳錢

平田前內務大臣閣下題字　樂翁公眞筆

◯天覽 白河樂翁 後編

碧瑠璃園著　齋藤松洲畫伯裝幀　川村清雄畫伯裝幀

定價金壹圓貳十錢　郵稅金壹拾二錢

前宮內大臣土方久元伯題字　樞密顧問官黑田清綱子題字

◯史傳小說 高山彥九郎 （前編後編）

碧瑠璃園著　川村畫伯裝幀

各價金八十錢　郵稅金八錢

香雲渠人著　梶田半古畫伯口繪　齋藤松洲畫伯裝幀

◯史傳小說 後藤又兵衛

菊版特製紙數四百五十餘頁

定價金壹圓　郵稅金十錢

皇后宮御歌　土方伯爵謹書　宮中御歌所主事坂正臣先生題字　東京麟祥院什寶寫眞數葉入

◯家庭讀本 第壹編 春日局

碧瑠璃園著　川村畫伯裝幀　（紙數四百餘頁　菊版特製美本）

定價金壹圓拾貳錢　郵稅金壹拾貳錢

碧瑠璃園著　川村清雄畫伯裝幀

◯家庭讀本 第貳編 大石陸女

紙數四百餘頁　菊版上製美本

定價金壹圓　郵稅金壹拾錢

小松原前文部大臣閣下題字　簑笠翁著　齋藤畫伯裝幀

◯偉人小說 水戶光圀

菊版特製全一冊

定價金壹圓　郵稅金壹拾貳錢

大町桂月先生序　原拙朔先生著

◯蒲生氏鄉

四六版　全一冊

定價金四拾六錢　郵稅金四拾錢

◯東京朝日曰く、儉約、力行、慈悲、正義の權化たるかを疑はしむる樂翁公生涯の面目は神彩ある筆端に奕々として現はる家庭の讀物として生ける敎訓を與ふべく其の華冑の人たりしために華族の子弟に讀ませて大なる感化あるべし裝釘の麗美なる事近來の隨一也

◯讀賣曰く、家庭に於ける歷史的讀物として上乘なるもの

世評一斑

◯電業之世界評…裝幀の美を以て出版界を驚したる忠孝小說叢書白河樂翁……前篇後篇と併せて社會の歡迎を受くる事疑なし現時の文壇一方に平民文學興起の傾向あれば一方に斯くの如き貴族的權力者の文學漸く流なさんとす注目すべき現象と云ふ可し◯新小說曰く、家庭に於ける婦女の團欒にも男子が一夕の讀物としても吾人は如是の小說を大方に薦む

王政復古の主唱者又忠孝節義の權化たる高山彥九郎が一代の事業、人格、勤王の眞面目は現代第一流の史傳小說家碧瑠璃園先生が獨得の妙筆に依りて活躍す、もし夫れ彼が最後の悲劇に至りては讀むもの必ず肉動き靈戰くの概あらん

一代の豪華を極めし桃山の春は夢の如く消えて天下盡く其舊恩を捨て強者たる關東の旗下に阿諛するの時其の最後の結果を豫期しつゝも弱者たる豐家を佐けて士道に殉じたる後藤又兵衛が千變萬化其半生の大活劇は捕へて本書中にあり爽絕快絕情夫をして起たしむ

◯發兌　東京市本石町　至誠堂　電話振替本局東京長三一　六六七　六六四　番

皇后宮御歌　土方伯爵謹書　宮中御歌所主事坂正臣先生題字　東京麟祥院什寶寫眞數葉入

春日局は千代田城大奧の創始者として又大奧政治の開發者也局が三代將軍の乳人として上りたる前後の事情は從來の小說傳記にも記されたれど幼時の銀雛稻葉佐渡守なる其人の實子と局の間に挿まりて苦辛艱難せる事情三人の實母として未だ何人の筆にも上りたる事なし著者茲に見る處ありて局の幼時中年時を詳記し延て晩年時に及ぶ筆致圓熟事情明白家庭の讀物として最も趣味と敎訓とに富むもの也

義士快擧の裏面史として見る可きものは本書あるのみ夫れ陸女は絕世の忠臣貞雄の妻として夫以上の辛酸を嘗めて其事業を成就せしめし者著者燃犀なる眼は早く此點に着眼してよく烈婦が一代の事蹟を縱橫に描寫す以て永く婦人の龜鑑とするに足る好小說なり

光圀卿は德川時代有數の偉人にして勤王家也著者は馬琴の別號たる簑笠翁を自稱せる當代有數の文學家の匿名也其流麗なる詞藻と高雅なる對話との間に知らず識らず光圀卿の人格事蹟を了解せしめて千載の下尙此偉人を偲びて轉た欽慕の情に堪へざるものあり本書の特色は勿論其高潔にして健全なる趣味の流露に存すれば家庭の讀物として頗廣く社會青年男女の讀物として頁く敎訓と趣味とを感得せしむる事他に比なし

大町桂月氏序して曰く「才筆縱橫逸氣奔放覺えず人をして氣昂り情熱せしむ」と著者が滿腔の磊塊蒲生氏鄉なる一英雄を執へ來りて縱橫論評文辭爛熳として痛快を極む偉人若くは偉人たらん者は必ず此書に啐喙して其翻山倒海の手腕を伸ぶるを要す

◯發兌　東京市本石町　至誠堂　電話振替本局東京長三一　六六七　六六四　番

大町桂月先生校訂解題

學生文庫

袖珍特製
舶來紙刷
携帶至便

全四十五冊
定價各卅錢
郵税各四錢

既刊書目

1 南朝史傳全
2 日本外史上
3 益軒十訓上
4 謠曲全集上
5 曾我物語全
6 西遊記上
7 源平盛衰記壹
8 大平記壹
9 心學道話全
10 常山紀談上
11 日本外史中
12 益軒十訓中
13 先哲叢談全
14 義經記全
15 一休諸國物語全
16 常山紀談中
17 益軒十訓下
18 源平盛衰記貳
19 謠曲全集中
20 西遊記下
21 百人一首一夕話全
22 狂言記全
23 太閤記壹
24 大岡政談上
25 日本外史下
26 續心學道話全
27 禪學名著集全
28 四書全
29 常山紀談下
30 源平盛衰記參
31 太閤記貳
32 源平盛衰記四
33 太平記貳
34 源平盛衰記五
35 太閤記參
36 謠曲全集下
37 太閤記四
38 太平記三
39 太閤記五
40 太平記四
41 太平記終
42 正續文章軌範全

●周到卓拔なる批評的解題は各書の性質綱要價値を詳說す

東京市日本橋區本石町三丁目
發兌 至誠堂
振替東京一七四四

340
36

終